

親子を対象にした外遊びプログラムの開発(第3報) (温故知新プロジェクト)

著者	尾? 司, 塩瀬 治, 杉浦 典和
雑誌名	東京家政大学生生活科学研究所研究報告
巻	38
ページ	13-17
発行年	2015-07
出版者	東京家政大学生生活科学研究所
URL	http://id.nii.ac.jp/1653/00009964/

《温故知新プロジェクト》

親子を対象にした外遊びプログラムの開発 (第3報)

尾崎 司*¹ 塩瀬 治*² 杉浦典和*³

Building a Support System for Parents and
Young Children to Play Outdoors

Tsukasa OZAKI, Osamu SHIOSE, and Norikazu SUGIURA

1. はじめに

「親子を対象にした外遊びプログラムの開発 (第2報)」では、1年目の試作プログラムを振り返り、改善するなかで、板橋区成増社会教育会館と尾崎研究室との連携事業として、「おそとカフェ」というプログラムを開発し、実施した様子を報告した。

本稿では、2014年度に実践した「おそとカフェ」の活動を振り返りながら、親子を対象とした外遊びプログラム「おそとカフェ」についてまとめ、最終報告をおこないたい。

なお、2014年度のプロジェクト研究は、3年間の研究のうち3年目の最終段階に位置づけられ、親子を対象とした外遊びプログラムとして3年間のアクションリサーチをまとめる段階である。

2. 「おそとカフェ」の概要

このプロジェクト研究は、もともと親世代が現代生活に失われた技術や知恵・文化を体験的に学び、日常的に楽しむことが、子ども世代への伝承に大きな影響を与えるのではないかという思いのもと、減少する外遊びに焦点を当て、親子の外遊びを促進し、どのような仕組みづくりが可能であるかを検討してきた。

そして、研究代表者は、乳幼児とその親を対象とした外遊び支援プログラム「おそとカフェ」を開発し、実施した。「おそとカフェ」とは、「外遊びを通しての、乳幼児と親・学生の成長の場」であり、大きく分けて(1)外遊び空間、(2)カフェ(食育)、(3)協働企画という3つで構成されている。

参加者は、受付を済ませると、下記のように各コーナーで自由な時間を過ごす。

1) 外遊びコーナー

外遊びコーナーでは、遊び環境を最小限、構成し、乳幼児が自由に遊ぶ空間を提供している。スタッフは、乳幼児を預かり保育する役割ではなく、乳幼児と保護者の遊びを基本的には見守り、促進し、親子での体験が共有できるように援助する役割である。

したがって、あまり遊び環境を作り込まないようにし、遊びの「場」に巻き込まれながら、遊びでの偶発性を大切に発展させていくようにしている。また、家庭ではなかなかできない体験や外だからこそできること、親世代が幼児・児童期にやっていたことなどをなるべく取り入れるようにしている。

遊んでいる中では、自分の子ども以外の子どもにも話しかけたり、一緒に遊んだりするお母さんの姿や、異年齢で群れになって遊ぶ姿が見られる。

外遊び空間を構成するのは、学生の学びとなっている。KOPAの矢郷恵子さんに外遊びの環境を学んだり、外遊びを推進する園へフィールドワークを重ね、日々、外遊びの空間を研究している。「モノを上からつり下げたり、シンボルになるものを置くと、どのような反応を示すか」、「本物アイテムを置くと、子どもはどのような使い方をするか」などテーマを持って毎回、おそとカフェの環境づくりをすることで、大学では学ぶことが難しい実践的な外遊



写真1 暑い時には水遊び

*¹ 東京家政大学短期大学部 (Tokyo Kasei University Junior College)

*² 独協学園中学高等学校 (Dokkyo Junior & Senior High School)

*³ 板橋区成増社会教育会館 (Narimasu Social Education Hall)

び空間の学びになっている。

ある時、子どもに大人気の、段ボールで作った猫のバスがかなり破損してきたので、リニューアルしたことがあった。段ボールの猫のバスは、底と上部がない段ボールの中に入って歩くことで、バスに乗っているつもりになって乳幼児が遊ぶアイテムであるが、両サイドに穴を空け、持ち手となるようにしていた。しかし、実際には、子どもは正面に貼ってある猫の頭の部分をつかむことが多く観察された。ただ作っただけでは分からず、乳幼児と遊びながら気づくことが大切であり、それをもとに作りかえていく必要性を学生は学ぶことができた。

2) カフェ・コーナー

カフェ・コーナーでは、フリースペースとカフェスペースを設けている。ティーパックのお茶（ノンカフェインのものやハーブティー、スティックタイプのコーヒーなども）を用意しているので、ポットのお湯を入れて自由に飲むことができ、わが子が遊んでいる姿を傍らで見守りながら、参加者同士が会話を楽しみ、リラックスすることができる。

(1) フリースペース

フリースペースでは、自宅から持ってきた食材を焚き火などで自由に調理できる。初めて知り合った方でも、火の前では気持ちもほぐれ、会話がはずむ。おすそ分けなども自然におこなわれ、食を介してコミュニケーションが進む。定番のマッシュマロをはじめ、持ち寄った食材を家族や仲間と焼く。焚き火を囲むと、自然に会話が弾み初対面でも打ちとけることができるので、焚き火はコミュニケーションを促進するツールであると言える。野外で直火での調理は、何でも美味しい。最近では、オール電化でなかなか目になくなった火をじっと見つめる子どももいる。3年試行してきて、焚き火はお父さん同士のコミュニケーションが自然な形で成立しやすいと気づかされた。火の番は、気づいた人が交代でやるが、お父さんがすすんで集まってくる。おそとカフェでは、お父さんの参加率が回を重ねるごとに高まっている。

(2) カフェスペース

カフェスペースでは、スタッフがその日のメニューを決めて、おなかにたまるものやおやつを参加者と一緒に行うことができるスペースである。学生たちはこれまで、餃子せんべい、白玉団子、かき氷、大学芋、棒パン、パンなど、親子で楽しめるメニューを作ってきた。火熾し講座の時には竹筒ご飯を炊いたり、最近では親子でホットサンドを作り、具材を自由にトッピングして楽しんでいる。親子で、子ども用包丁を持って、食材を切り、野外で一緒にお

いしいものを作って「味わう」体験は、わくわくする思い出になる。あるお母さんからは「こんなに手軽なもので子どもが喜ぶんだったら、うちに帰ってからでも作ってみます」という声もあり、おそとカフェで楽しんだことが家庭ともつながって再度楽しめることは、親子関係支援にとって重要である。

また、おそとカフェでは、防災食（非常食・保存食）の観点を食材にできるだけ取り入れている。缶詰や小麦粉、粉類、乾物、干し野菜など非常食・保存食を使って美味しいものを野外で日常的に作れるようになると、災害時でも火を熾して美味しいものや子どもの好きなおやつも作ることができ、気持ちもあたたかくなると考え、取り組んでいる。エコ・マネジメントにもできるだけ心がけている。食材を調達し調理するなかで、ゴミや洗い物に使用する水となるべく少なくする努力や、保温調理法やエコクッキング、ソーラーエネルギーを活用したクッキングなどを試み、実践できるようにしている。

3) ゲスト・コーナー

専門家や近隣 NPO の方をゲストに招いて、あるいは学生が企画して、様々な講座・イベントを実施している。

これまでの講座・イベントは、子どもの家づくり（ダンボールハウス、ティピ、ビニルシートの家）、水遊び（廃材を使ったおもちゃを用意）、空気あそび（廃材を使ったおもちゃを用意）、たまねぎの皮で染め物、野外でのパネルシアター・絵本の読み聞かせ、竹筒でご飯を炊く、餃子の皮せんべい作り、秋の味覚・きのこの炊き込みご飯作り、火熾し（講座）、クローバーの草木染め（講座）、イチヨウの葉で工作体験（講座）、など多岐にわたっている。

ゲスト・コーナーは、社会教育会館にとってはアウトリーチ活動となっており、室内ではなく野外でのインフォーマルな学びを構成している。また、おそとカフェの中に講座を融合することで、講座が終わった後もおそとカ



写真2 野外でパネルシアター



写真3 野外でダイナミックに段ボール遊び

フェで参加者はゲストと交流し深く学ぶことができる。

3. 学生が成長できる仕組みづくり

1) 学生スタッフの役割

おそとカフェでは、協働的關係性を重視し、そこにかかわる学生スタッフや講師を積極的に配置することで、学生が成長できる環境づくりをおこなっている。

おそとカフェの学生スタッフは、お手伝い的な役割や親に代わって子どもの面倒を見るのではなく、親が気軽に話ができ、親子の絆を深める場となるよう、親子関係支援を促す存在としてかかわっている。

おそとカフェに携わる学生スタッフは、表1のように、様々なことを学んでいる。

特に育児支援を学ぶ学生にとっては、親と直接関わることで子育て中の親にどのようなニーズがあるのかを理解し、その配慮を学ぶ機会となっている。また、親や地域の人を交えての企画ミーティングに学生が参加することで、協働して子育て世代を支える地域コミュニティづくりを実感できる。

その他、妊婦の参加者のためにハーブティーを用意したり、受付で親と会話を楽しみ接することでホスピタリティ・マインドを身につける。進行時間の管理や、怪我・火傷の対処（病院への連絡フローやスタッフの動き）などについても実践のなかで学んでいる。

表1 おそとカフェでの学び～キーワード

企画力、コミュニケーション能力、協働体験、子育て支援（親子関係支援／家族間関係支援）、子育て世代の現状に触れる、父親の育児参加促進、課題提起能力（問題解決能力）、ファシリテーション思考・技術の現場トレーニング、サービス・ラーニング、野外における乳幼児の遊び環境を知る、親子で楽しむ食育、防災食、焚き火の理解、ゲスト講師からのインフォーマルな教育等

2) 学生の事例から

次に尾崎ゼミ4年生の学びから、学生の成長を確認したい。ゼミ生の田中さんは、おそとカフェでのスタッフのかかわりを卒業研究としてまとめ、運営しやすい仕組みづくりやスタッフ・マネジメントに言及している。

まず、田中さんは、参加者である親のニーズがどこにあるのかを書き出し整理し、これまでのスタッフとしてのかかわりを検討した。「無料で遊べるレジャーを求めている」、「とくに交流は求めているのではないか」（むしろ大勢の初対面と話すのは苦痛ではないか）、「遊び空間で子どもが遊びたがっていたから来た」、「支援してもらいたいと思っている人はいない」、「通りがかりで楽しそうだったから入ってみた」、「友達に連れて来てもらった」、「前回は楽しめたので、また来た」などのニーズは、大学で学ぶ子育て支援のニーズとは少し違い、違和感を感じている。こういう場でのスタッフと参加者の関係は「支援する人—される人」というイメージが強かったが、回を重ね、「学生」という立場で保護者にかかわっていくうちに、自分の立ち位置や経験から「共に成長する関係性」を意識し始める。「支援しなくては」と肩に力を入れるよりも「育児や家事、子どものことについて、教えてください」と、参加者から学ばせてもらう姿勢でいると、学生たち自身の知識も増え、参加者のエンパワメントにもつながり、共に成長する関係性が築かれるということを学んでいる。ワークショップ（ゼミ）でのゼミ生たちの言葉を借りれば、「アルプスの少女ハイジ（スタッフ）とクララ（参加者）の関係性」であり、スタッフはハイジのポジションとして、参加者と同じ目線で一緒に成長していく存在であることが支援者にとって重要だということに学生たちは気づいていく。また、参加者が「気の合う人が見つかった」、「大人とおしゃべりするの楽しかった」という姿や満足感を目の当たりにすることにより、全体の雰囲気をもっと良くなることを経験することで、おそとカフェの居心地の良さをどう作っていくかを学ぶことができている。

さらに、子どもが無我夢中で遊び、親がリフレッシュするためには、学生たちの言葉を借りれば「親子のGOOD ENOUGH」の関係を築くこと（親子のほどよい関係づくり）が大切で、「同じ空間にいながらも干渉しすぎでない状態」を作り出すことが、かかわりとして大切であることを学んでいる。田中さんは、次のエピソード（1）のように「親子が同じ空間にいながらも、干渉しすぎでない状態」が、親のリフレッシュ（この場合は講座に集中することができたこと）や、子どもの遊びの充実につながるとして、スタッフがタイミングよく子どもの気持ちをくんでアプローチしていくこと、親が子どもと少し離れることに不安がない状態にしていくかかわりを、おそとカフェで

は意識している。スタッフを経験することによって、「親子がベッタリと共依存」することよりも、「お互いが好きなことをして充実していること」すなわち「ほどよい距離が保てること」が心地良いという考えに至っている。

【学生のエピソードから (1)】

講師を招き、親向けの講座をおこないました。子どもたちは親の見える範囲で、近くの砂場や楽器が置かれているスペースでスタッフと遊んでいました。途中、さびしくなり、お母さんに泣きつきに行く H ちゃん。その状況では、お母さんはあやすことに必死になり、集中して講師の話聞くことはできません。スタッフ K さんはそこですかさず、玩具を手に取り、H ちゃんにアプローチしました。「あっつい！」といいながら、お椀に入った泥水を触る K さん。H ちゃんの視線が K さんに向かいます。「さわってみる？」と H ちゃんにお椀を差し出すやりとりの末、H ちゃんは泥水で遊び始めました。お母さんのすぐそばで、K さんと H ちゃんはかかわり続けます。子どもが遊びに熱中しはじめると、お母さんもまた講師の話に集中することができました。

失敗から学ぶことも多い。次のエピソード (2) は、受付直後のかかわり方がその後のおそとカフェでの過ごし方に影響するという学んだ事例である。学生たちは、おそとカフェの反省会でこの失敗事例に関して深く振り返り、参加者をどう迎え入れることが大切なのかを学んでいる。エピソード (3) では、状況に応じて参加者のお父さん、お母さんにも協力してもらえることも必要であるということ学んだ事例である。この事例から、人付き合いが好きなお母さんや、リピーターで場慣れしているお父さんに、事前に「新しい人が来たら、いろいろ教えてあげてほしいです」等と学生がお願いしておくことが大切であり、参加者のお母さんが声をかけてくれたおかげで初めて来た親子の居場所ができた学生たちは振り返っている。また、小学生低学年の子どもが、乳幼児と積極的に遊んでくれたり、場所の案内をしてくれたり、玩具の遊び方を教えてくれたりする様子を観察するなかで、「保護者→相手の子ども」「子ども→相手の子ども」「子ども→相手の保護者」「保護者→相手の保護者」とアプローチしていくバリエーションも実践の中でさりげなく促進できる「つなぎ役」として支援者の役割を学んでいる。

【学生のエピソードから (2)】

公園に遊びに来ていた父と息子が、おそとカフェの前を通りがかったので、私は「板橋区と家政大共催のおそとカ

フェというイベントをおこなっているのです、よければ遊びに来てください」と声をかけてみました。すると、気づかないうちに、その父と息子は受付を済ませ、その日「水遊びスペース」を設けていた遊び空間にいました。子どもは父親にしがみついている状態で、父親も子どもの不安そうな様子に戸惑っていました。スタッフ K さんが、玩具を用いて「お水だよー！」とあやしにいても、じーっと見つめるだけ。父親も、子どもと遊ぶことに慣れていないのか、「遊んでおいで」と促すだけです。ここには居場所がなさそうだと感じたのか、その父と息子はおそとカフェから出て行ってしまい、その日戻ってくることはありませんでした。

【学生のエピソードから (3)】

「ここで受付をしたら猫のバス（ダンボール製の学生が作った遊具）に乗れますか？」と初参加の父と息子がおそとカフェにやってきました。受付した後、遊び空間スペースに行くものの、猫バスはすでに誰かに使われていて、順番待ちをすることになりました。親子が手持ち無沙汰になり、どうしようかとフラフラ歩いていると、参加者のお母さんが男の子にマシュマロ串を差し出し、「食べてみる？」と声をかけてくれました。男の子は「うん！」と応じ、そのお母さんの案内で焚き火台へ向かい、しばらくの間はマシュマロを火にあぶって食べることを楽しんでいる様子でした。

尾崎ゼミでは、おそとカフェの受付でどう迎えるかはホスピタリティが問われること、帰りは「笑顔をお土産に」持って帰ってもらうことを学生たちに呼びかけている。学生たちはこれを受けて具体的な実践として、手作りのアンケートボードを用意して、その日の感想を該当項目にシールを貼ることで表現してもらっている。これは、よくあるアンケート用紙に記入するのではなく、また統計をとるも

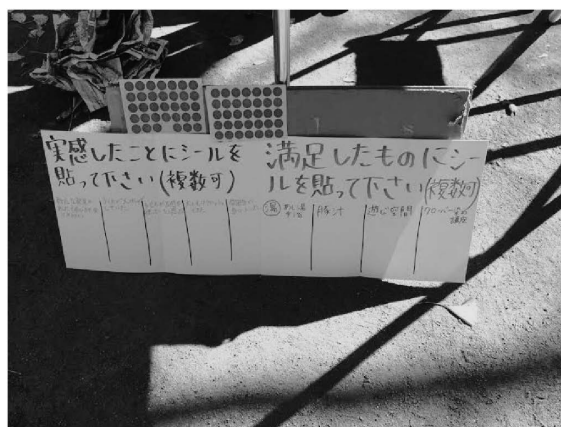


写真4 ボードを活用して情報を共有

のでもなく、参加者と会話を楽しみながら感想や要望など確認し関係性を築く場として機能している。

アンケート（文章）だけでなく、実際に直接話をしてみると、「新たな発見や意外性を語る保護者が多いと実感しました」と学生たちは語る。特に「自然の中だと、こんなにとびきりの笑顔になるのか」「室内で遊んでいる様子とまるで違う」「外遊びは大切」というように、おそとカフェは「いつもと違うわが子の姿」や「子どもが無我夢中で遊ぶ姿」に親が出会う場となり、そうした新たな発見を家庭にお土産として持ち帰ってもらうことが子育て支援につながると学生は感じている。こうした満足感が口コミやリピーターを増やし、親子の居場所づくりになっていくという循環を生み出している。

4. 地域コミュニティづくりに向けて

おそとカフェは、東京家政大学の学生と教員が地域の現場に入り、地域住民や社会教育会館等とともに、地域の課題である外遊び環境づくりと子育て支援への解決を目指し、地域づくりに継続的に取り組みながら、地域の活性化及び地域の人材育成に資する活動である。

おそとカフェを域学連携事業としてとらえると、親子の外遊び支援や学生が成長する場という側面だけでなく、地域活性化としてのプログラム（図1）とみることができる。

3年間の活動を振り返ると、おそとカフェによって地域が活性化し、親子が地域で子育てを楽しむには、下記のような課題がある。

- 地域の団体や住民への呼びかけやネットワークづくりができていなかった。
- 板橋区と大学が主催事業としてやっているという印象がある。
- 対象を親子だけでなく、もっと多世代に広げ、取り込む必要がある。
- 年間計画や仕組み、活動内容が周知されていない。

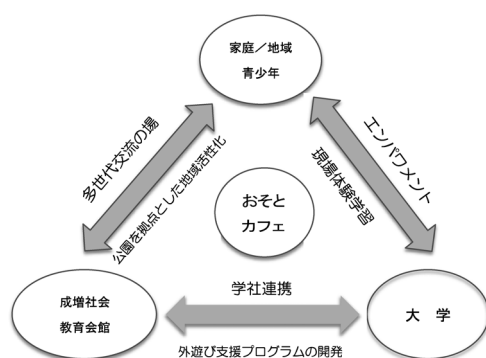


図1 域学連携事業としての協働モデル

参加者の中からもっと地域に根ざした活動にすべきだという要望があり、2015年度からは、これまで実施していた板橋区平和公園から会場を赤塚エリアに移し、現在、さらなるアクションプランに取り組んでいる。

地域コミュニティづくりには、(1) ビジョン・目的、(2) 体験・経験、(3) それに伴う感情、の3つを共有することが大切である（尾崎、2009）。異なる背景や考え方を持つ人たちとビジョン・目的を共有し、実際に「おそとカフェ」に協働して取り組むなかで、様々な物語が生まれ、それが地域コミュニティづくりにつながっていく。

2015年度より次の3年間を《展開期》とし、現在、「おそとカフェ」への理解を得るために、板橋区みどり公園課や町会を訪問している。また、近隣中学校を訪問し、中学生が「おそとカフェ」でプレーワーカーとしてスタッフと一緒に青少年が参画しやすい活動を提案し、「おそとカフェ」で活躍できる場を作っている。

このように、地域において多世代交流がなされ、公園が「地域の庭」となるように、「おそとカフェ」の取り組みを展開していきたい。

5. おわりに

2012年度から3年間、親子の外遊びを支援するためのプログラムを試行錯誤しながら、域学連携事業としての「おそとカフェ」を開発することができた。

「おそとカフェ」によって、砂場やすべり台以外で子どもと何をして遊ぶのか分からないという親に対して、「いつもの公園でこんなことができますよ」という可能性を提案し親子の外遊びを豊かなものにしながら、失われつつある遊び場の原風景を再生していくことができるのではないだろうか。さらに、地域で親子の遊び場を支援する仕組みを検討していくことが、公園を拠点とする地域コミュニティづくりにつながると考えている。

今後3年間を展開期として、おそとカフェを地域に根ざした取り組みにし、地域の青少年参画も視野に入れつつ、公園を拠点とした多世代交流の場にしていきたい。また、おそとカフェを社会資源である幼稚園や保育園の園庭で活用する取り組みも提案していきたい。

文 献

- 1) 尾崎 司：子どもの心の育ちと人間関係。寺見陽子編著，pp. 192-193（2009）。
- 2) 板橋区：いたばしグリーンプラン2020（2011）。
- 3) 田中佐知子：親子のための外遊び空間～おそとカフェスタッフの心得。平成26年度卒業研究。